

## 西田幾多郎の書斎「骨清窟」と哲学の現場

市川 秀和\*

### A STUDY ON KITARO NISHIDA'S STUDY-ROOM "KOSSEI-KUTSU" AND REALITY OF THE PHILOSOPHY

Hidekazu Ichikawa

Kitaro Nishida (1870-1945) is the most important philosopher in modern Japanese philosophy. His philosophy is based on eastern Japanese-Chinese thinking and mixed with elements of Western thought. Underlying all this a profound religious element. Because of its uniqueness it is known as "Nishida Philosophy". Moreover, his famous text is "Study of Good (1911)".

Nishida's study-room "Kossei-kutsu" from the time he was a professor at Kyoto University has been moved to Unoke in 1974 (originally built in 1922).

In this paper, I chiefly describe the details about his study-room.

#### 1. はじめに

日本近代の哲学思想を代表する西田幾多郎 (1870-1945) の故郷・石川県宇ノ気町では、昭和43年に開館した「町立西田記念館」において、西田のさまざまな遺品や遺墨、自筆原稿類、そのほかの資料を収集・展示して、「西田幾多郎の人と思想」を広く普及させることに努めるとともに、昭和56年からは所謂「西田哲学」の合宿共同研究のための「夏季哲学講座」を現在まで開催し続けている。さらに平成14年6月には当記念館が新築移転して「石川県西田幾多郎記念哲学館」（設計：安藤忠雄）が新たに開館するに到った。

また旧西田記念館の敷地内へ昭和49年に京都の西田邸から移築された書斎「骨清窟」がこれまで一般公開されてきたものの、このたびの新築移転にともない、その今後について検討を重ねた結果、現状のままで保存活用していく基本的な方針が取り決められた。なお、このような機会に際して書斎「骨清窟」の建築史調査を実施することができ、その調査研究から明らかとなった学術的価値に基づいて国の「登録有形文化財」に認定される見通しとなった。

従ってかかる近況を踏まえて本稿は、哲学者西田幾多郎の書斎「骨清窟」を含む京都・田中飛鳥井町の住まいの建設経緯並びに当時の状況等を報告するものである。さらにに付け加えると、この書斎に於いては、人生の悲哀に打ち拉がれる西田自身が自己の思索に日々没頭した「哲学の現場」であったと同時に、「京都学派」と呼ばれる高弟たちと深く人格的に触れ合いながら日夜議論を激しく交わした「哲学の現場」でもあったという、その独特な建築的場所の性格に敢えて留意して、建築論的視座から素描を試みたいと考える。

---

\* 建設工学科 建築学専攻

## 2. 京都・田中飛鳥井町の住まい ―西田と三井財閥との関わり―

西田幾多郎の生涯における「住まい」の遍歴については、次男西田外彦氏の「父の住んだ家々」<sup>1)</sup>や旧記念館々長上杉知行氏の「居住歴」が具体的な所在地等をまとめており、また孫上田久氏の『祖父西田幾多郎(正統)』では、その日常生活の様子が人間味ある描写で叙述されている<sup>2)</sup>。さらに西田の哲学的思索の歩みも含めた評伝として、上田閑照氏や遊佐道子氏の著作が知られる<sup>3)</sup>。このような既存の文献などを大いに参照しながら、ここでは京都の住まいを中心に詳述する<sup>4)</sup>。

### 2-1.) 京都への移住と思索の展開

明治 43 年 8 月に四十歳の西田幾多郎は、京都帝国大学助教授に任じられて家族とともに京都へ移住して落ち着き、念願の哲学教師として研究と教育にいつそう専念できることになった。

西田とその家族はまず吉田近衛町の借家に入り、約二年(明治 43 年 8 月～大正元年 12 月)を過ごした。その後妻子のために、ゆとりのある住環境を求めて田中上柳町(旧田中村字中河原町)へと移って約十年(大正元年 12 月～大正 11 年 9 月)の借家生活を送ることになるが、この間の大正 7 年 9 月に母寅三の死去、翌年 9 月に妻琴美が脳溢血で倒れ、さらに翌年 6 月には長男謙の死去、続いて幼い娘たちが入退院を繰り返すなど、生死の現場に直面せざるを得ない日々が続いたのである。この頃から西田の日記には深い悲哀の滲み出た短歌が詠まれることになる。

ところが家庭生活の現実に対して、京都移住直後の明治 44 年 1 月に『善の研究』を出版し、さらに『思索と体験』(大正 4)や『自覚に於ける直観と反省』(大正 6)、『意識の問題』(大正 9)の重要な著作が次々と現れ出すなど、人生の悲哀を哲学の動機とする西田の独創的な思索が本格的に展開し始めた。さらに久松真一や植田寿蔵(明治 45 : 入学年)、務台理作(大正 4)、三宅剛一(大正 5)、三木清(大正 6)、木村素衛(大正 9)、高坂正顕(大正 9)、西谷啓治(大正 10)など、後の「京都学派」という雄大な思想山脈を形成する弟子たちが続々と入学し、西田の周囲は活気に満ちていった。

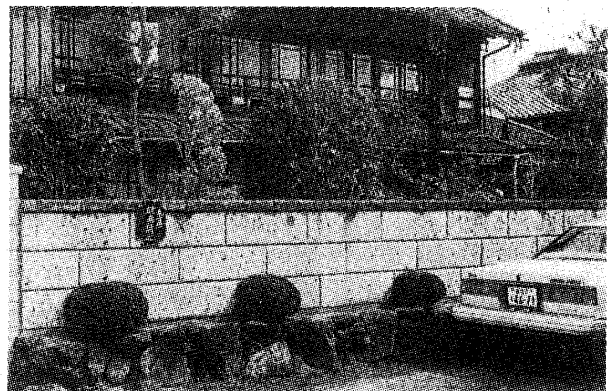
このように京都へ落ち着いてから、家庭生活に起こり始める悲運とともに、哲学思索が大きく展開し始めていく当時の西田の様子を、三女の静子や弟子の三宅は以下のように伝え残している。

「まもなく玄関に大きな金木犀のある田中中河原町の家へ移りました。この家は大きな部屋が二つと二階の南に三つ部屋があり、北に二つの部屋がありました。父は二階の西南の部屋に起臥していて、そこに机が二つ置かれてありました。貧乏で本もその頃はそんなに沢山持っていませんでした。」

西田静子「父」<sup>5)</sup>

「大学への往復に先生の家の二階を正面にみる道を通った。先生の家は大きな二階家ではあったが、何となく殺風景な、下宿屋のような感じで、庭には杉か何か黒ずんだ高い樹が無造作に立ち並んでいた。・・・ときとすると、二階の南側の廊下を往ったり来たりしている先生の姿を見かけるときもあった。」

三宅剛一「思い出すまま」<sup>6)</sup>



田中上柳町の住まい



三井 高公



西田 幾多郎



三井八郎右衛門高棟

静子の回想からも推測されるように、京都・田中上柳町での借家住まいでは、耐え難い家族の病と死に立ち向いつつ哲学研究に打ち込む西田と、父の心情を受け止めて見守る妻と子供たちとによる質素な家庭生活が営まれていたのである。またこのような日常の現場にあって、それを断ち切るかのように超然と思索する西田の姿を垣間見た弟子三宅剛一の心底には、かかる「師の像」が深く刻まれるとともに、何か熱く高まるものが静かに働いていたのではなかろうか。

## 2-2.) 三井財閥による新居建設

ところで、大正5年9月に京都帝国大学政治経済科へ三井財閥の嗣子三井高公が入学し、その保証人を西田幾多郎が引き受けていたのであるが、詳しい経緯等は全く定かでない。ただこの頃の「西田の日記」によると、入学後の大正6年4月から三井高公は、田中上柳町の西田宅を時々訪ねて世話になっていたようである（次頁の表「西田と三井財閥の関わり」を参照）。

三井高公は大正9年7月に卒業し、同年11月には旧越前藩主の松平侯爵子女と結婚して、翌年から日本銀行に勤務し始めた。こうして高公の身边が落ち着いた頃の大正11年4月8日には、父で三井家当主高棟が西田宅を訪ね、翌々日には西田自身が京都の三井邸に招かれたことを、西田の日記は伝えている。このとき三井高棟は、以前から西田の私生活を心配していたのか、息子高公の卒業にあたっての感謝の気持ちもあって、「天下の哲学者があんな質素な生活をしているのはたまらない」「よし、私がやりましょう」と、西田に新居建設の提供を申し入れたものと思われる。なお三井高棟は、慈善病院や京都植物園の開設などから、社会文化事業家としても既に広く知られていた。



# 西田幾多郎と三井財閥との関わり

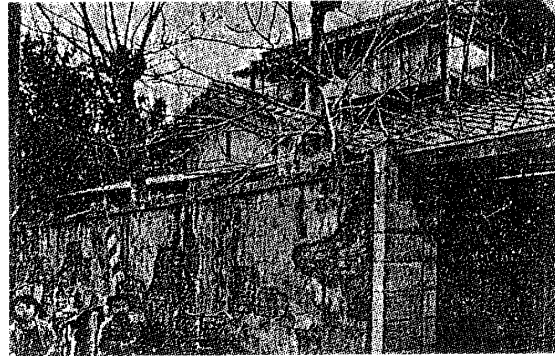
— 明治 43 年の京都移住から、大正 11 年の新居建設、それ以後 —

西田幾多郎とその家族	西田幾多郎の「日記」 (三井高公に関するもの)	三井八郎右衛門高棟、高公
<p>明治 43 年 8 月 西田、京都帝国大学助教授に任ぜられ、家族と共に京都吉田近衛町へ移住。</p> <p>明治 44 年 1 月 『善の研究』出版。</p> <p>大正元年 12 月 田中上柳町へ転居。</p> <p>大正 4 年 3 月 『思索と体験』出版。</p>		<p>明治 20 年、三井総領家は江戸以来の京都・二条油小路町の住居を離れ、東京に本宅を移す。</p> <p>三井高公(1895-1992)は、三井財閥の第 10 代当主三井八郎右衛門高棟(1857-1948)の嗣子として育れられる。</p>
<p>大正 6 年 5 月 『現代に於ける理想主義の哲学』出版。</p> <p>同年 10 月 『自覚に於ける直観と反省』出版。</p>	<p>大正 6 年 4 月 28 日(土) 午後三井高公来る。</p> <p>同年 6 月 19 日(火) 三井男爵来訪。</p> <p>同年 6 月 22 日(金) 三井高公来訪。</p>	<p>大正 5 年 9 月 高公、京都帝国大学法科大学政治経済科入学。 保証人には、文科大学教授の西田幾多郎になる。</p>
<p>大正 7 年 9 月 3 日 母寅三(76)死去。</p>	<p>大正 7 年 9 月 18 日(水) 夜三井高公来る。</p>	
<p>大正 8 年 6 月 14 日 長女弥生、上田操と結婚。</p> <p>同年 9 月 14 日 妻琴美が脳溢血で倒れる。</p>	<p>大正 8 年 1 月 20 日(月) 夜三井高公来る。</p> <p>同年 5 月 29 日(木) 午後三井尋ぬ。</p>	
<p>大正 9 年 1 月 『意識の問題』出版。</p> <p>同年 5 月 17 日 長女弥生に男子薫誕生。</p> <p>同年 6 月 11 日 長男謙(23)死去。</p>	<p>大正 9 年 2 月 3 日(火) 夜三井高公来る。</p> <p>同年 5 月 2 日(日) 三井、恒藤へ手紙。</p> <p>同年 7 月 1 日(木) 午前今田、波多野二氏来訪。三井高公卒業せし由。</p>	<p>大正 9 年 7 月 5 日 高公、京都帝国大学卒業。</p> <p>同年 11 月 9 日 高公、松平銀子と結婚。</p>
<p>大正 10 年 5 月 三女静子、発熱で入院。</p>		<p>大正 10 年 2 月 高公、日本銀行へ勤務。</p>
<p>大正 11 年 5 月 四女友子、六女梅子共にチフスで入院。</p> <p>同年 9 月 16 日 飛鳥井町の新居へ移る。</p>	<p>大正 11 年 4 月 8 日(土) 三井八郎右衛門氏来訪。</p> <p>同年 4 月 10 日(月) 三井八郎右衛門氏方へ招かる。</p> <p>同年 9 月 16 日(土) 転宅。</p>	<p>大正 11 年 4 月 21 日 三井の東京今井町邸に英国皇太子を招待して、晩餐会を催す。</p>
<p>大正 14 年 1 月 23 日(金) 妻琴美(49)の死去。</p> <p>大正 15 年 論文「場所」発表。</p>	<p>大正 13 年 4 月 24 日 三井高公氏欧州出発の留別会に行く。</p> <p>大正 14 年 3 月 30 日(月) 三井よりステッキ二本贈らる。</p>	<p>大正 13 年 4 月 27 日 高公、家族と共に欧米見学のため神戸より出港。</p>
<p>昭和 2 年 10 月 『働くものから見るものへ』出版。</p> <p>昭和 3 年 8 月 京都帝国大学・定年退職。</p>	<p>昭和 4 年 3 月 27 日(水) 三井高公来訪。</p> <p>同年 3 月 30 日(土) 三井の茶菓の会に行く。</p>	<p>昭和 4 年 3 月 高公、帰国。</p> <p>同年 6 月 三井本館 開館。</p> <p>同年 9 月 高公、三井本社の社長秘書役に就任。</p>

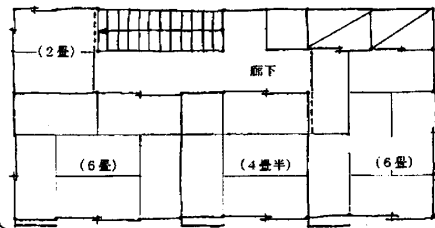
註：上表の作成に当たっては、以下の文献を参照した。  
『西田幾多郎全集 第十七巻(日記)』岩波書店、上田久『続 祖父西田幾多郎』南窓社 1983 年  
『三井八郎右衛門高棟傳』東京大学出版会 1988 年(三井の書には、西田に関する記述は全くない)



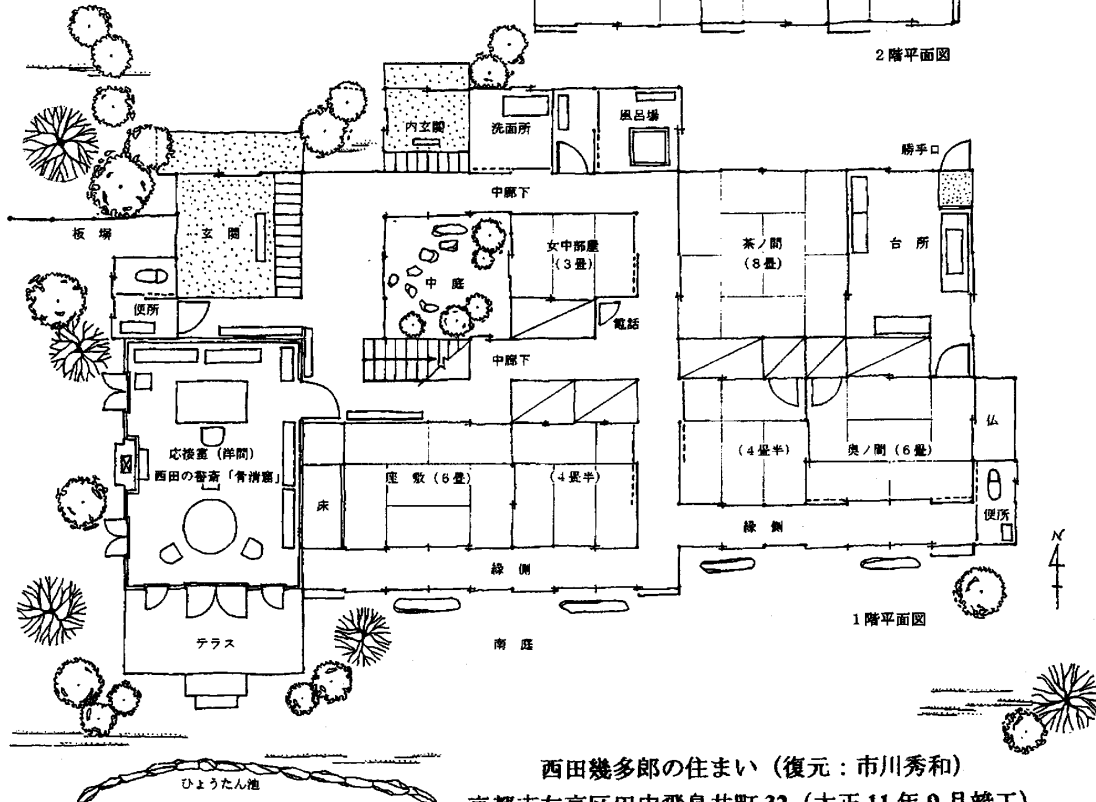
玄関（提供：西田幾久彦氏）



外観



2階平面図



1階平面図

西田幾多郎の住まい（復元：市川秀和）  
京都市左京区田中飛鳥井町 32（大正 11 年 9 月竣工）

こうした三井高棟の好意を有り難く受け入れた西田は、「自分の研究生活上のこと、病臥している妻琴美のこと、多勢いる子供たちのことを考えて」<sup>8)</sup>、その思い通りの住まいが大正 11 年 9 月に田中飛鳥井町において完成し、初めての「持ち家」となったのである（上の復元図参照<sup>9)</sup>）。この新居は伝統的な日本住宅とは異なり、その中廊下や中庭によって個室化が強められた間取りと玄関南側の洋風応接間（書齋）から、大正期・都市型中流住宅のモダンな性格が顕著に現れている。ここから西田の住要求には、近代住宅理念の受容が認められる<sup>10)</sup>。ともかく 9 月 16 日に西田は家族とともに新居へ移り住み、引っ越し作業には弟子の久松真一や務台理作、山内得立などが駆け付け、病身の妻琴美は「つり籠に寝かされたまま」<sup>11)</sup>運ばれたのである。



書斎の中の西田幾多郎（昭和4年頃）



書斎の内部（現・宇ノ気町）

### 3. 西田の悲哀の日々と思案の展開 — 書斎「骨清窟」と哲学の現場 1 —

田中飛鳥井町の新たな住まいへと移って快適な生活環境が整ったものの、これまで以上の苦難な日々が西田に迫っていたのであり、その具体的な現実を見ていくにあたって、大正11年9月の新居引っ越しから、大正14年1月の妻琴美の死去に至るまでの「西田の日記」に注目してみたいと思う。この期間の日記の特徴とは、「草花名」と「短歌」が頻出することである。そこでまず「草花名」について、その一部分を以下に引用してみよう。

大正12年11月22日（月）けふは椿、山茶花、杉、山吹。

大正13年4月7日（月）けふにて自分の思ふだけの樹木を植えた。

榎、木樨、木蓮、柳、沈丁花、桃、黄楊、木母、青桐。

（西田の日記）

日記に書き並べられた草花や植木の名前は、広い敷地の新居へ移ったことで始められた西田の庭づくりを物語るものであるが、その動機は妻琴美への深い慈愛からであった。「父は食後や又は学校から帰ったときなど必ず母の枕で話したり野の花庭の花を何時も置いていた」<sup>12)</sup>と三女静子が伝えているように、病床の妻と西田が共に寄り添って草花の純粹なうつくしさを眺め楽しむ情景が思い浮かぶ。妻の死去後、「昨年の秋窓際植えし紅椿咲きか散らむ見る人なしに」と詠む時期を最後に、草花や植木が日記に書き留められることはほとんどない。

また「短歌」について、「人生には唯、短歌の形式によってのみ掴み得る人生の意義というものがある」（「短歌について」全集十三巻）と考えた西田は、病身の妻や娘と向き合う日々の不安な心情を詠み綴っている。言葉の限られた歌は、言葉を絶する無限な人生の悲哀を包み込むのである。

子は右に母は左に床をなべ春はくれども起つ様もなし / 我心深き底あり喜びも憂の波もとどかじと思ふ

愛宕山入る日の如くかがやきて燃し尽さん残れる命 / 運命の鐵の鎖にひきづられふみにじられて立つすべもなし

（西田の日記：大正11,12,13年）

このように日記の「草花名」と「短歌」とは、この当時の西田の悲哀を表現するものである。そして「大正14年の1月、母は遂に亡くなりました。父は相談相手もなく、暗く淋しく書斎にとじこもる日が多く、外出さえもあまりしなくなりました。」<sup>13)</sup>と静子が伝えるように、妻を亡くした西田は、独り書斎に於いて人生の悲哀と自己の思索を深めざるをえないのであった<sup>14)</sup>。



書齋の外観（提供：西田幾久彦氏）



宇ノ気・移築直後の書齋  
（広報うのけ 昭和49年11月5日）



現状の書齋の外観（宇ノ気町）



書齋のテラスに立つ西田幾多郎  
（提供：燈影舎）



西田幾多郎とその家族  
（中央：西田、右端：琴夫人）

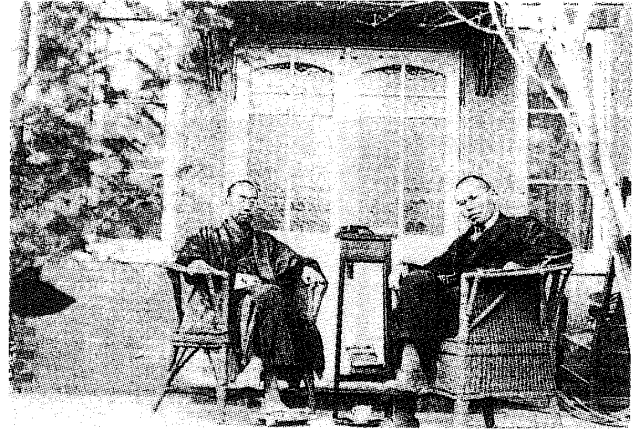
我々の限りある人生に於いては、如何に多くの出会いや別れがあり、またどれほどの喜びや悲しみ、憂い、苦しみ、過ちが満ち溢れていることであろうか。そうした人生の真味を共有してきた最愛の存在との死別に残された者に大きな喪失感を与えると同時に、消え去ることのない尊い真の實在となってより強く働きかけてくるのであり、生死に於ける非連続の連続と言えようか。

耐え難い日々の現実打ち拉がれた西田自身が、その於かれた場所を徹底的に直視した思索を強靱に進めようとしたからこそ、「人生の悲哀」を哲学の動機と捉え、「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生まれる」（全集十四巻）という思索の根源を見出したのである。西田にとってこの世界に生きていることこそ「哲学の現場」であり、殊に「書齋」に於いては、最も掛け替えのない親しき「哲学の現場」であったと思われる。そしてこの特別な建築的場所には、滋賀県永源寺の禅僧寂室による詩「老来殊に覚ゆ山中の好きことを。死して巖根に在れば骨もまた清し。」に基づき、「骨清窟」という齋号がつけられていた。それは、西田の日常を生きる本質的なあり方としての「境涯」を如実に表現しているもので





書斎の前庭にて：西田幾多郎と木村素衛（昭和19年）



書斎のテラスにて：西田幾多郎と三宅剛一（大正12年頃）

ある。また「かの椅子によりて物かき此床に入りて又ふす日毎夜毎に」と詠み慈しんだ書斎「骨清窟」に於いて日々を生きるということとは、場所へ自己を頼み宿すとともに、場所から自己が照らされ支えられることの他ではなく、それは言わば生死の世界に於いて自己が澄み（＝住み）込むことでもあろうか。さらに言い換えれば、西田にとっての書斎という場所は、「住まうこと」が本質的に成立する真の在処であったとも言えよう。故にこそ、かかる書斎「骨清窟」を含む京都・田中飛鳥井町の住まいは、西田に於いて真の「終の住処」であったと言わねばならない<sup>15)</sup>。

#### 4. 西田と弟子たちの触れ合い — 書斎「骨清窟」と哲学の現場 2—

「哲学の現場」としての書斎「骨清窟」とは、西田が自己と向き合って思索を深めていく孤独な場所であるとともに、弟子たちとの創造的な出会いの場所としての「哲学の現場」でもあったと考えられる。真の絶対的な個と個とが直接触れ合う場所に於いてこそ、最も生き生きとした哲学の現場が開かれるのではなかろうか。かかる情景を高坂正顕は次のように書いている。

「私にとって一番親しみ深いのは、今の飛鳥井町のお宅である。……先生の書斎は十二畳位の洋間で南北に長く、東のドアから入るとかなり大きなテーブルが北に向かって据えてある。西には窓が二つ、マントルピースを挟んで開いており、南はガラス戸のついたドアを開けると庭に出れるようになっていた。庭には一寸した池があって、鯉なぞがかってあった。先生は生きものは好きで、白い毛並の目が青く澄んだベルシャ猫が誰かから贈られて、暖爐の前や、椅子の中に丸くなっていることもあった。その南のドアに近いあたりに、藤椅子が四、五脚置いてあって、それが応接用になっていた。そこで色々のお話を伺ったことが昨日のように思い出される。退官されてから、毎月一度、我々若いものがお邪魔して、初めは、先生の哲学上の思想につき色々とお話を伺い、我々も遠慮のない質問をする。「我と汝」では足りない、「彼」が必要ではないかと質問するものもあれば、事実が事実を限定するとか、瞬間が瞬間を限定するようなことについて、先生に喰い下がるものもある。表現とは、無を距てて互いに限定することだという意味の説明を求めるものもある。こうして先生も若い我々と同じく若い者のように、盛んな議論をされたのであるが、それも今では二十年近い昔のことになってしまった。議論は夜が更けるにつれて熟してきて、十二時位になるのは珍しくなかった。そんな時にも終わりには、先生がアラビアン・ナイトの話なぞされて、和やかに別れることが多かった。それも、この書斎兼応接間に於いてであったのである。」

高坂正顕「先生の書斎」（下線は引用者による）<sup>16)</sup>





久松真一(1889-1980)



三木清(1897-1945)



高坂正顕(1900-1969)



西谷啓治(1900-1990)

西田幾多郎の弟子たち：京都学派のひとびと

「若い我々と同じく若い者のように、盛んな議論をされた」という西田幾多郎は、常に弟子たちの前では真の人格と人格、個と個とが触れ合うような立場で真摯に向き合うことによって、単に哲学上の概念や知識、思想を与えたのではなく、互いの存在の根底に迫り入って響き合うように働く呼応の生きた力を、言うなれば「哲学以前であると同時に哲学以後」（西谷啓治）あるいは「思想プラス・アルファ」（上田閑照）を伝えていたのではないかと思われる。それはまた、三木清が「先生と話をしていると勉強がしたくなる」と感じ、唐木順三が「精神の源泉へつれもどして下さる存在、人生のよろこびとなるような存在」と感じ得ることで伝えられたものであろう。さらに師西田に対して西谷啓治が「自分にとって自分自身に至る道になるもの、真実の意味で師であり得るものに会うということは、稀有な仕合せである」と語ったように、真に触れ合い出会われた個と個とが共存する場所に於いてこそ、互いの主体的な自己は創造的な可能性を開くとともに、その本来のあり方を獲得する。このように西田の書齋「骨清窟」という建築的場所とは、京都学派のひとびとが相互に真の在処に出会った「哲学の現場」でもあったと言うことが出来る。

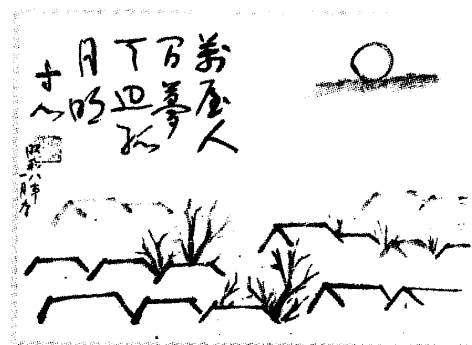
##### 5. おわりに ―書齋「骨清窟」の宇ノ気移築の経緯―

以上のことから、大正 11 年 9 月に三井財閥の支援によって、京都・田中飛鳥井町にて完成した西田幾多郎の住まいと書齋「骨清窟」の建設経緯・状況ならびに、その建築的場所の実存的意義をめぐる素描を不十分ながらも試みてみた。

西田幾多郎の没後、かかる京都・田中飛鳥井町の住まいと書齋「骨清窟」がどのような経緯を辿ったのかについては、上杉知行氏の「西田書齋」<sup>17)</sup>にほぼ詳しいが、本稿を終わるにあたって簡潔に言及しておきたいと考える。

昭和 20 年 6 月 7 日に死去した西田幾多郎の葬儀の直後、木村素衛が中心となって弟子たちの間では京都・田中飛鳥井町の住まいを記念保存していくことで同意を得たようである<sup>18)</sup>。しかしその直後の木村の急死(昭 21)もあって具体的な進展が見られないまま、田中飛鳥井町の住まいには三女静子がその後長く独居している状態であった。ところが昭和 47 年春頃に静子の入院にともない、この住まいが空き家となったため、西田家によって遺憾ながらも取り壊しが決定された。昭和 49 年 4 月の取り壊し作業と同時に、西田の「哲学の現場」であった書齋「骨清窟」だけは故郷の石川県宇ノ気町へ寄贈されることとなって解体作業が始まった。そして書齋の解体が終わって、荷を積んだ大型トラックが宇ノ気へ向けて発つ際には、数人の弟子たちが深々と合掌して見送ったという。同年 11 月には宇ノ気の町立西田記念館敷地内に於いて書齋の移築作業が完了して、一般公開されることになったのである。

**謝辞：**書齋「骨清窟」の調査に当たって、ご遺族の西田幾久彦先生と上田薫先生にはご丁寧なご助言と資料の提供をいただき深謝申し上げます。また石川県立看護大学教授浅見洋先生と石川県西田幾多郎記念哲学館専門員の大熊玄氏、さらに燈影社の方々の温かいご配慮に感謝致します。



西田幾多郎の水墨画

## 註

- 1) 下村寅太郎編(1971)『西田幾多郎 同時代の記録』岩波書店 所収
- 2) 上杉知行(1988)『西田幾多郎の生涯』燈影舎 / 上田久(1978,1983)『祖父西田幾多郎(正統)』南窓社
- 3) 上田閑照(1995)『西田幾多郎 人間の生涯ということ』岩波書店 / 遊佐道子(1998)『伝記 西田幾多郎』燈影舎
- 4) なお京都の文化人の住まいを取り上げた著作として、前久夫(1989)『京が残す先賢の住まい』京都新聞社が知られるが、西田の田中飛鳥井町の住まいは取り壊された後のために記載されていない。
- 5) 西田静子(1949)「父」『わが父西田幾多郎』アテネ文庫 弘文堂 所収
- 6) 前掲書：下村編『西田幾多郎 同時代の記録』所収。
- 7) 前掲書：上杉『西田幾多郎の生涯』p118、遊佐『伝記 西田幾多郎』p302 参照。
- 8) 前掲書：上田『続 祖父西田幾多郎』p79
- 9) 田中飛鳥井町の住まいの復元にあたっては、上田『続 祖父西田幾多郎』p79 の「間取り」を参照するとともに、ご遺族の西田幾久彦氏と上田薫氏からご教示をいただいた。
- 10) 西田の場所論と住居観については、別稿で取り上げたい。なお西田の水墨画(上絵)に月夜の家並みを眺望した絵があり、その画布には「万屋人間夢 天辺孤月明」と書かれ、住居観の探究で注目すべきものがある。
- 11,12,13) 前掲書：西田静子「父」
- 14) 西田における人生の悲哀と思索の展開について、前掲の上田閑照『西田幾多郎』や浅見洋(2001)「悲嘆の沈潜から無我の境地へー「我子の死」を直視した西田幾多郎ー」北國文華 10 号から多くを学ばせていただいた。
- 15) ただし西田の死去(昭和 20 年 6 月 7 日)は、鎌倉・姥ヶ谷の住まいに於いてであった。この住まいは現在、学習院が管理している。これについては、岡野浩(2002)「学習院 西田幾多郎博士記念館(寸心荘)について」『西田幾多郎関係資料一付 全集未収録書簡ー』学習院大学史料館収蔵資料目録第 18 号 所収 を参照されたい。
- 16) 高坂正顕(1948)「先生の書齋」『西田幾多郎先生の追想』(1996 復刊) 燈影舎 所収
- 17) 上杉知行「西田書齋」『西田幾多郎の生涯』所収
- 18) 木村素衛(1966)『花と死と運命 日記抄』同刊行会 p264

## 図版出典

飛鳥井町の住まい・外観：京都新聞 昭和 49 年 1 月 24 日付「京の思想家散歩(3) 西田幾多郎」  
 西田幾多郎とその家族：西田幾多郎全集 付録 17  
 西田幾多郎と三宅剛一：三宅剛一(2002)『人間存在論の哲学』燈影舎  
 京都学派のひとびと：「京都哲学撰書」第一期・第二期のパンフレット 燈影舎  
 西田幾多郎の水墨画：燈影舎の小冊子「燈影」表紙

\*そのほかの出典の断りのない写真等は、本文や註の参考文献より転載しました。

(平成 14 年 12 月 6 日受理)